

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520612

研究課題名（和文）出土資料の分析による古代東アジアの服飾制度と社会秩序

研究課題名（英文） A study of The System Clothes in the Ancient East Asia and the Social Order through Analysis of the Archaeological Things

研究代表者 小林 聡 (KOBAYASHI SATOSHI)

埼玉大学教育学部 教授

研究者番号：40234819

研究成果の概要（和文）：

1～8世紀は東アジア全体の政治・社会・文化が変化した時代である。本研究では、後漢・魏晋南北朝時代・初唐・盛唐にいたる時期（1～8世紀）の中国やその他東アジア各国の服飾の諸相を、主として出土文物をデジタル化（JPEG ファイル）された画像資料として収集した。デジタル化した資料は壁画・画像磚・人物俑などを含み、2011年3月時点で、総計7721点に上る。これをもとに、1～8世紀における東アジア、特に中国における服飾史についての基礎的な見通しを発表した。

In 1-8centuries,the whole East Asia changed politics,society,and culture. In this study , I collected digitalized image data(JPEG files) of archaeological things of official clothes in the Later Han dynasty 後漢,the Wei-Jin and the Southern and Northern dynasties 魏晋南北朝 and the Sui and the Tang 隋唐 dynasties (1-8 Centuries) and the other countries in East Asia, and investigated these . The digitalized image data includes wall painting,painted bricks, dolls etc., the total number of JPEG images reached 7721 files at march 2011. On this data base, I published some fundamental surveys concerned the history of clothes in the East Asia, especialy China in the 1-8centuries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：中国制度史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：出土文物

### 1. 研究開始当初の背景

本研究が考察の対象とする1～8世紀は、中国史で言えば、後漢王朝の樹立から魏晋時代を経て、非漢民族（とりわけ騎馬民族）が華北を中心に様々な国家を作っていく五胡・北朝時代、さらには世界帝国へと発展

した隋唐王朝の最盛期までを含み、東アジア全体で言えば、朝鮮半島や日本列島など中国の周辺において、様々な民族が国家形成を推進し、6世紀以降は、本格的に唐制を導入していった時代にあたる。

東アジア世界がどのように形成されたかという問題については、今まで「冊封体制論」など様々な理論が提唱されてきたが、それらは主として文献史料をもとにした議論であり、使用される出土資料も、「広開土王碑」に代表されるように、文字史料が多かったことは否めず、また、研究の方向も政治制度や国際関係の分析に研究の重心が置かれがちであった。そのため、文化的な流れを具体的な物品に即して具体的にとらえようとする試みはあまりなされてこなかった。出土文物を活用した研究としては、日本においては林巳奈夫氏の一連の研究があり、近年の中国においては、たとえば孫機氏の「輿服」研究や、鄭岩氏の壁画研究があるが、全体的に言って、いまだ萌芽的な段階にとどまっているといえる。

## 2. 研究の目的

研究代表者の小林の研究上の関心は、漢唐間における礼制の変遷であり、特に4～6世紀において、華北において北族の政権が相次いで建国され、江南でも漢族王朝が独自の制度を構築していった状況下において礼制がどのように変化していったのか、そういった試行錯誤が隋唐王朝の諸制度に結実していった過程はどのようなものであったのかを探ることに主眼を置いている。また、中国における礼制改革が、東アジア諸国の国家形成にどのような影響を与えたのかについても関心がある。そして、冷静が目に見える形で表現された服飾制度に着目し、近年豊富になってきた出土文物を活用して服制の流れを追うことが本研究の主眼である。具体的には、1～8世紀における東アジア各地域の出土資料を、デジタル画像ファイル(JPEG)の形式で収集して、分類・整理を行い、伝世文献史料や従来の各

国の服飾史研究を土台にしつつも、新たな得られた知見を活用して、当該時期における東アジア服飾史の全体的な流れを把握しようとした。さらに、一歩進んで中国礼制の一環としての服飾制度が、当該時代における民族移動(北方騎馬民族・漢民族などの移動)や日本を含めた周辺諸民族の国家形成や制度構築の際に、どのような影響を与えたのか、また受容の主体によってどのような変容が加えられたのかを探った。

## 3. 研究の方法

まず、収集文物の対象として、画像石・画像磚・綫刻画・壁画・陶俑、及び石窟寺院遺跡のレリーフ・壁画などに表現された人物像の中から服飾資料として研究上の使用に耐えるものを選別し、デジタル画像化した。ソースは、基本的には各種発掘報告書・研究書に載せられたものとするが、一方、中国各地の博物館で撮影した写真・動画等も資料として使用した。

収集の範囲は、1～8世紀の古墓から発見された画像石・画像磚・綫刻画・壁画・陶俑、及び石窟寺院遺跡のレリーフ・壁画などに表現された人物像とし、その中でも服飾資料として研究上の使用に耐えるものを選別した。なお、今回の収集では、基本的には甲冑姿の武人像は対象とせず(作業の便宜上スキャンした場合はある)、通常の公的・私的的衣服のみを扱った。

具体的な分類法であるが、まず、中国王朝内の文物を、a) 後漢(1～2世紀)・b) 魏晉・東晉・五胡十六国(3～5世紀)・c) 南朝(4～6世紀)・d) 北魏(5～6世紀前半)・e) 東魏・北齊(6世紀後半)・f) 西魏・北周(6世紀後半)・g) 隋(6世紀末～7世紀初)・h) 初唐(7世紀頃)・i) 盛唐(8世紀前半)というように、王朝によって

大まかな分類を行って収集し、その他、j) 新疆地区(主としてトルファン地区)の出土文物・k) 高句麗壁画墓・1) 日本の埴輪なども収集の対象とした。

こうして収集した文物のデジタル画像をもとに、「2. 研究の目的」で述べた東アジア服飾史の再構成を行うための研究を進めた。この点については、「4. 研究成果」及び「5. 主な発表論文等」を参照されたい。

#### 4. 研究成果

3年間の研究を通じて、当該時期における服飾関係の画像資料をかなり多くデジタル化して収集することができた。また、そうして収集した資料をもとに、魏晋南北朝時期における服制に関する基礎的な研究を世に問うた。

作業は、まず、①東アジア各国で出版された図録・研究書・研究論文、②中国で刊行された発掘調査報告(『文物』『考古』『考古学報』など)に載せられた、漢唐間の出土文物の画像や平面図などをスキャンし、デジタル画像化していくことが基本作業となる。

また、中国各地の博物館に足を運び、多くの出土文物を実見し、許可があった場合はデジタルカメラで撮影を行った。今回の科学研究費助成金を使用した出張は2回であり、第1回目は2009年6月に実施し、遼寧省瀋陽市の遼寧省博物館、及び同省遼陽市の遼陽博物館を訪問し、第2回目は2009年11月に実施し、陝西省西安市の陝西省博物館と西安博物院、及び臨潼市の兵馬俑博物館を訪問した。また、これ以外に、2009年3月に私費で河南省洛陽市を旅行した際には、洛陽博物館及び洛陽古墓博物館(古代芸術博物館)を訪問し、2010年3月に四川

省を旅行した際には、成都市の四川省博物館と広漢市の三星堆博物館を訪問し、これらの出張及び私費渡航を通じて人物俑など、服飾史研究に資する出土文物を大量に撮影(許可があった場合のみ)することができ、各種図録も購入(私費にて購入)することができた。さらに、今回の科学研究費とは別に、2008年12月、關尾史郎氏を研究代表者とする基礎研究(A)「出土資料群のデータベース化とそれをを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」の研究活動の一部として実施された出張において、甘肅省蘭州市の甘肅省博物館、同省の高台市博物館や各地の遺跡(酒泉市丁家閘十六国墓など)を訪問し、出土文物の実見と撮影を行っている。

以上のような作業を経てデジタル画像化した出土文物は、平成22年度末の段階で総計7721点であり、その内訳は以下の通りである。

- a)後漢→351点(主として画像石・壁画・人物俑)
- b)魏晋・五胡十六国→1116点(主として画像磚・壁画・陶俑。なお、河西地区の画像磚画像磚667点、及びj)新疆トルファン地区の出土絵画資料若干を含む)
- c)南朝→145点(主として陶俑)
- d)北魏→597点(主として壁画・綫刻画・陶俑)
- e)東魏・北齊→831点(主として壁画・陶俑)
- f)西魏・北周→416点(主として壁画・陶俑。敦煌莫高窟壁画を含む)
- g)隋→618点(主として壁画・陶俑敦煌莫高窟壁画を含む)
- h)唐→3284点(主として壁画・陶俑敦煌莫高窟壁画を含む)
- k)高句麗→171点(吉林省輯安地区、及び北

朝鮮平安道・黄海道地区の壁画)

- l)日本の埴輪→123点(主として関東地区)  
m)その他→69点(各種の「梁職貢図」に載せられた各国の人物像)

以上のデジタル化作業をもとに、現存する文献史料ともつきあわせて、漢唐間の東アジア、特に中国における服飾史の再構築を試みることとなった。その研究成果の一部として「5. 主な発表論文等」にあるような研究論文や学会発表を行っており、そのほか、現在「五胡・北朝期における服飾の「多文化性」—河西・朝陽の両地区を中心に—」と題した論文も提出済みである。これまでの研究から、魏晉南朝時代や唐代については服飾制度に関する文献史料も一定のボリュームがあり、魏晉南朝に関してはかなり前から論文を発表している。しかし、五胡・北朝の服飾制度は政治的混乱等もあって文献史料が乏しいが、反面、出土文物の量が近年特に増加してきたので、これを活用していくことが望まれる。2011年3月までに公開された文物の画像資料のうち相当部分を収集し得たので、これをもとに、今後さらに研究成果を発表していくつもりである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. 小林 聡、在中国古代礼制、服制史上河西出土文物的特点、高台魏晉墓与河西历史文化国际学术研讨会论文集、(査読無)高台县县委・县政府、甘肃省敦煌学会・敦煌研究院文献所、187-194頁、2010年8月
2. 小林 聡、北朝時代における公的服飾制度の諸相—朝服制度を中心に—、大正大学東洋史論集』(査読無)第3号、25-56頁、

2010年4月

3. 小林 聡、朝服制度の行方—曹魏～五胡東晉時代における出土文物を中心として—、埼玉大学紀要教育学部(人文社会科学Ⅲ)、第59巻-第1号、69-84頁、2010年3月
4. 小林 聡、漢唐間の礼制と公的服飾制度に関する研究序説、埼玉大学紀要教育学部(人文社会科学Ⅲ)、第58巻-第2号、233-244頁、2009年9月
5. 小林 聡、河西地区出土文物における朝服用事例に関する一考察、西北出土文献研究、(西北出土文献研究会)2008年度特刊、53-61頁、2009年3月

[学会発表] (計6件)

1. 小林 聡、五胡・北朝期における北族的服制の展開—河西・朝陽・大同の出土文物主たる題材として—、九州史学会、2010年12月12日、九州大学
2. 小林 聡、唐朝六大服飾体系の成立過程—六朝隋唐における礼制の変化と他文化受容—、六朝学会大会、2010年6月13日、斯文会館(東京)
3. 小林 聡、北朝的服飾制度の形成—西晋礼制から隋唐礼制への展開と服飾体系の変容—、瀬戸内魏晉南北朝研究会、2010年3月28日、徳島大学
4. 小林 聡、唐代服飾制度の形成と礼制の変容—「常服」の制度化を中心にして—、大正大学東洋史研究会、2009年6月28日、大正大学
5. 小林 聡、隋唐的服飾体系への道—北朝隋唐時代における北族的服飾の制度化を中心に—、九州史学会、2008年12月14日、九州大学
6. 小林 聡、魏晉南北朝時代における冠服制度と礼制の変容—出土文物中の服飾資

料を題材として一、東洋史研究会、2008年  
11月3日、京都大学

研究者番号：

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

( )

研究者番号：

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

